

# 洋行と新聞学

— 1920年代の小野秀雄の旅から —

Ono Hideo's Grand Tour to the West in 1920s:  
An Analysis of Recollections by the Founder of Journalism and Mass Communication  
Studies in Japan

長谷川 倫 子

はじめに

第1章 洋行まで—東京帝国大学・萬朝報・東京日日新聞

第2章 1923（大正12）年の旅

第3章 1928（昭和3）年の旅

おわりに

はじめに

この研究は日本の近代化を担ったものたちの海外経験はその後の日本社会に何をもたらしたのかという疑問から始まった。明治時代以降の日本では、欧米への視察や留学などで見聞を広め、海外での体験を通じて得られた知識や技術を持ち帰る海外渡航に「洋行」という言葉が使用されるようになった。日本における新聞学の創始者のひとりでもある小野秀雄（以下では小野と略記）は、1923（大正12）年と1928（昭和3）年の2回にわたって洋行を行っているが、自己の回想録『新聞研究五十年』（毎日新聞社、1971年）では、それぞれの旅の様子を詳細に綴っている。本研究では、大正末期から昭和初期にかけての小野の洋行を事例として、旅する小野が西欧社会で見聞きした事物や出会いに着目した。

日本の近代化の担い手たちの中には、幕末から明治にかけて洋行を経験したものが少なくない<sup>1)</sup>。鎖国時代の終焉にともない、自国が西欧の先進国から遅れをとっていることを認識させられた日本人の目指した近代化は、まずは西欧社会を知ることから始まった。日本国の発展のための課題の認識が当時の明治新政府には急務であり、そのためにもアメリカやヨーロッパへの人材の派遣は、近代国家建設のトップ・リーダーを育成するうえで重要な手段の一つとなった。

本研究では、小野の回顧録の中に残されている自身の洋行体験の部分を読み解く。1911（明治44）年にジャーナリストとしてのキャリアをスタートさせた小野であったが、1919

## 洋行と新聞学

(大正8)年からは、アカデミズムの世界で新聞学という新しい研究分野に挑むことになった。この回想録が出版されたときの小野は86歳になっていたが、小野が新聞学のパイオニアとしての人生を振り返ったこの本の懐旧談のなかでも、若いころの2度の洋行を振り返った部分は、かなりの部分を占めている。

莫大な旅費だけでなく、船舶や鉄道を乗り継ぐ長旅を要した時代にあつて、ヨーロッパやアメリカでの見聞を広めた小野は、この時代の数少ない洋行経験者としても先駆者となった。この小野の洋行で特筆に値することは、妻子を日本に残してロンドンに留学した夏目漱石とは対照的に、1回目の旅も2回目の旅もパートナーを伴っていることである。一般論であるが、西欧社会では社交活動においてパートナーシップが尊重される傾向にある。専門的なキャリアを目指していた小野夫人の人脈が垣間見えるエピソードもこの回想録には残されている。

先進国の新聞学の紹介が重要な部分を占めていた日本におけるマス・コミュニケーション、マス・メディア研究の黎明期であるが、小野は、洋行経験を通じて知ることのできたドイツの教育機関を参考にしながら、日本独自の新聞学やジャーナリストの育成方法の確立を目指し、東京大学に日本初の新聞学の研究機関を、また上智大学に新聞科を創設し、日本のマス・コミュニケーション、マス・メディア研究は、ここから日本のアカデミアにおける立ち位置を獲得していくことになる。本論では、日本の新聞学—マス・コミュニケーション、マス・メディア研究—の確立に尽力したパイオニアである小野の残した100年前の洋行記録をたどることで、新聞学の黎明期における日本人パイオニアと西欧社会の関係性を考察する。

### 第1章 洋行まで—東京帝国大学・萬朝報・東京日日新聞

1885(明治18)年8月14日、滋賀県に生まれた小野の人生の方向付けを行ったものの一つに、東京帝国大学<sup>2)</sup>で学んだドイツ語がある。小野とドイツ語の出会いは第三高等学校<sup>3)</sup>時代からであるが、大学入学後さらにそのドイツ語に磨きをかけた小野は1910(明治43)年に東京帝国大学(独文)を卒業し、1910(明治44)年1月、萬朝報社に入社した。ここからジャーナリストとしてのキャリアをスタートさせた小野であったが、採用されるうえで決め手になったのはドイツ語を学んだ小野の語学力であった。

学界担当記者となった萬朝報社で小野が最初に担った仕事は、シベリア鉄道で送られてくるドイツからの新聞、雑誌の切り抜きのうちから、日本の文化に貢献しそうな新しい出来事を選び出して翻訳することであった。萬朝報での小野は、文芸欄を取り巻く人びととの出会いを通じてその人脈を広げ、それは早稲田の演劇人たちとの交友関係にも及び、新劇運動の動向を見守る機会にも恵まれたのである<sup>4)</sup>。

石附(1992)によれば、明治20年代を境に東京帝国大学からの留学先としてドイツを選

ぶものが増えており、このドイツ化の流れは日本の教育の世界だけにとどまらず、政治・文化全体においてもドイツへの視線が注がれるようになったという。

東京帝国大学では、1887（明治20）年9月9日に史学科、英文学科、ドイツ文学科の3学科が増設され、ドイツ人講師ルードヴィッヒ・リース（Ludwig Riess）がお雇い外国人として着任していた<sup>5)</sup>。同大学の医学部と並び、戦前の立身出世のコースでもあった内務官僚等を目指すものたちは独法科を専攻する傾向にあったが、小野はそのエリートコースのトラックではなく自らドイツ文学科に進学した。また小野の回想録の中には、ドイツ語学習者の先輩でもあった森鷗外との交流についても記されている<sup>6)</sup>。

さらに小野は、1916（大正5）年9月から、東京日日新聞社の社会部に採用され、ジャーナリズムの現場での経験を積むことになった。小野の記者生活は1923（大正12）年2月まで続くが、1951（昭和26）年6月16日に設立された日本新聞学会の初代会長として壇上に上がった小野は、その学科開設の辞の中で、「日本新聞学会は学者のみならず、実際家も包含しており、かくして学問が実際から遊離する危険を防ぐことが出来ると思う<sup>7)</sup>」と述べている。このように現場と研究者の世界が結びつくことで社会におけるジャーナリズムやマス・メディアの在り方を問うことに社会的意義を見出す学会は世界でも初めてであるとして、小野はアカデミアと現場との相互協力の重要性を説いている。これは、新聞記者と研究者を両立させた経験もある小野のキャリアに裏打ちされたものであり、双方の世界に精通していた小野ならではのスタンスでもある。

東京帝国大学卒業後は新聞記者としてジャーナリズムの世界に身を置きながらも、新聞研究への思いを失うことのなかった小野は、上司の理解もあり、記者生活と研究の両立が可能な環境に身を置くことが可能になった。さらに小野の研究に対する情熱は消え去ることなく、1919（大正8）年には、東京帝国大学の大学院への入学を決意した。小野が大学院入学後に取り組んだ研究テーマは、洋書調所によって発行された官版新聞の研究で、とりわけ関心を持ったのは、幕府の洋書調所が発行した官板バタヒヤ新聞<sup>8)</sup>であった。

さらに、研鑽をかさねた小野は、母校の文学部の講師として比較新聞学の講義を担当するようになり<sup>9)</sup>、記者時代にも継続させていた小野の研究活動がここに実を結び、小野のさらなる高い目標に向かう挑戦は続けられた。

## 第2章 1923（大正12）年の旅

小野秀雄の第1回目の洋行は、小野が著した日本における最初の新聞通史でもある『日本新聞発達史』（1922年）出版の翌年に実現したものである。

この洋行のスポンサーになったのは、三菱の岩崎小彌太である。この洋行のために三菱が小野に提供した金額は残念ながら彼の回想録には明示されていないが、小野は、東京日日新

## 洋行と新聞学

聞の記者時代から岩崎小彌太から研究活動のためとして、毎月五十円の援助を受けており、東京帝国大学大学院への進学後もそのサポートは継続されていた。また、この洋行のスポンサーも岩崎小彌太であることは回想録にも記されている<sup>10)</sup>。

パトロンの岩崎小彌太自身も東京帝国大学法科大学を中退して渡英しており、ケンブリッジのペンブローク・カレッジ（1903年入学、1905年学位取得）への留学経験者であった<sup>11)</sup>。小彌太が留学した時代のケンブリッジは、そのほとんどが貴族階級や富裕層の子息たちで占められていた。夜会などで交友関係を広げ、幅広い趣味をたしなみ、社会貢献の一環として文化人や芸術家などに資金援助をおこなうことが特権階級に課せられたノブリス・オブリージュ（noblesse oblige）の重要な部分であることを、世界に通用する本物のエリートを目指した小彌太に、13世紀から続く英国で2番目に古い学園町であるケンブリッジは教えてくれたはずである。三菱の本社に岩崎小彌太を訪問した小野は、小彌太のことを「体格の立派な、イギリス風の紳士であった」と述べている<sup>12)</sup>。

以下では1923（大正12）年7月に出発して1924（大正13）年7月に帰国するまでの、小野の初めての洋行を見ていこう。

### 1. 訪れた研究所・教育機関

この小野の洋行の目的としては、「欧米諸国の新聞学研究および新聞記者の現状並びに施設を調査し、あわせて新聞事業の実情を視察」という記述が残されている<sup>13)</sup>。小野はヨーロッパを皮切りに、アメリカにも渡り、当時新聞学やジャーナリズム関連の教育が実践されていた主要な研究機関や大学を訪問している。図表1は、小野が訪れた大学や小野を受け入れてくれた大学関係者をまとめたものである。

8月8日にベルリンに到着した小野は、早速ベルリン大学に新聞研究室を開設したヨーリッゲル講師への訪問を試みる。折しも、ヨーロッパの教育機関は夏休み中だったこともあり、小野はヨーリッゲル講師を彼の自宅に訪問している。

図表1 第1回の洋行で小野が訪れた主な研究所・教育機関

研究所・教育機関	小野を迎え入れた研究者名	
ベルリン大学	ヨーリッゲル	新聞研究室開設者
ライプチヒ大学	カール・ビュッヒャー	1901年新聞科開設
ミュンスター大学	デスター	新聞史研究者、後にミュンヘン大学へ
チューリッヒ大学	ウエットシュタイン	1903年新聞科開設
ニューヨーク大学	ジェームズ・メルウイン・リー	
コロンビア大学 スクール・オブ・ジャーナリズム		
ミズーリーコロンビア大学	ウィリアムス学長	

出典：小野秀雄『新聞研究五十年』（毎日新聞社、1971年）

また、1901年にはライプチヒ大学に新聞科を創設し、ドイツにおける新聞学の権威でもあったビュッヒャー教授を訪ねて、小野は博士の別荘があるリーベンスウェルダに出向いている。ここで実現した86歳の教授との面談を通じて、小野がそれまで漫然と描いていた研究者としての目標が間違っていないことを確信できたと回想しているように、博士との時間は小野の旅の実りある収穫の一つであったようだ。またさらに、ビュッヒャー教授は将来有望な若手の研究者2名を小野に紹介してくれた。

その一人が、ミンスター大学のデスター氏で、彼はその後ミュンヘン大学の教授になることが決まっていた。もう1人はスイスのチューリッヒ大学のウエットシュタイン氏で、この二人との出会いは、後に小野が立ち上げることになる日本初の新聞学の研究所とジャーナリスト教育機関に大きな影響を与えることになった。

デスター教授との関係は、小野の2度目の洋行時にも継続し、1929（昭和4）年に小野が東大に初めての新聞研究所を創設した折にも招かれ、講演会では新聞学の社会的意義を語っている。

さらに、小野がこの洋行で自ら築き上げたドイツでの人脈は以外な方向にも結実することになる。上智大学（東京の四谷に昭和3年5月10日設立）の創設者であったルマン・ホフマン初代学長とビュッヒャー教授が旧知の関係にあったことから、ドイツの新聞学に造詣の深い小野にホフマン学長が協力を依頼し、1932（昭和7）年には上智大学専門部に新聞科が産声をあげた<sup>14</sup>。

現在に至っても上智大学の新聞学科はその独自性を発揮しているが、この新学科構想に際して小野が見習ったのは自らが訪問したスイスの大学であった。この回想録で小野は、上智大学の新聞科設置のための申請書類作成準備にあたって、スイスの大学を参考にすることを思いついたと以下のように回想している：

ライプチヒ大学よりもチューリッヒ大学の新聞学施設の方が当時の日本には適当であると考え、チューリッヒ大学の新聞学規定を提出したところ受け入れられた（小野【1971】177頁）。

ロンドン滞在を最後にヨーロッパを後にした小野はアメリカに渡り、まずは東海岸の伝統校でもあったニューヨーク大学とコロンビア大学を訪問したのち、鉄道で中西部のミズリー・コロンビア大学の新聞学部にも足を伸ばしている。

中西部の学園町で小野を迎え入れてくれたのは、杉村楚人冠と親交のあったウィリアムス学長で、杉村の丁寧な手紙のおかげで手厚いもてなしを受けることが出来たと小野は記している<sup>15</sup>。

本論では言及できなかったが、小野は欧米の研究機関や大学訪問の傍ら、訪れた各地の主

要な新聞社の訪問も精力的に行なっている。ここからは小野が、学問一辺倒ではなく、ジャーナリズムの現場からもさまざまなことを学ぼうとしているさまがうかがえる。

## 2. 豪華客船の定期航路

図表2は、小野たちが第1回目の洋行で使用した定期航路の船舶による日程をリストにしたものである。往路は欧州航路でヨーロッパに向かう旅を選択した小野たちは、神戸港からまずフランスへと向かい、ヨーロッパ各地を周遊の後、英国からアメリカ合衆国に向かい、北米大陸を横断して、サンフランシスコから横浜へというルートで帰国している。いずれのクルーズにおいても、小野夫妻は最上級のサービスを受けることのできるキャビンを利用し、船上での社交を楽しんでいる。以下では、それぞれの乗船記録ごとに、予想外の出会ひももたらしてくれた小野の旅をみていこう。

図表2 小野が利用した定期航路の船舶

船舶名	乗船区間	乗船期間
香取丸 (日本郵船)	神戸～マルセイユ	1923年 7月1日～8月3日
サキソニア号 (ホワイト・スター・ライン)	サザンプトン～ニューヨーク	1924年 4月19日～5月16日
天洋丸 (東洋汽船会社)	サンフランシスコ～横浜	1924年 7月1日～7月19日

### 〈神戸からマルセイユまで〉

小野たちが日本からヨーロッパまで乗船した船舶は日本郵船の香取丸<sup>16)</sup>であった。7月1日に神戸を出航した香取丸がマルセイユに着岸したのは8月3日で、小野たちの船旅は一か月を超えるものとなった。

香取丸によるこの定期航路はそれぞれの寄港地において、希望者が観光旅行も楽しめるように停泊期間を定めており、小野の回想録でもそれぞれの寄港先での観光を楽しんだ様子が綴られている。日本郵船の欧州航路の定期便の寄港地は以下ようになる（荒山正彦監修・解説『シリーズ明治・大正の旅行 第I期旅行案内書集成 第21巻』【2015】10-32頁原著出版は1916（大正5）年9月）：

横浜→神戸→門司又は長崎（石炭を積み込む、香取丸は門司港を利用）→上海→香港→シンガポール→マラッカ→ペナン→コロンボ→エジプト→マルセイユ→ロンドン→アントワープ

インド洋のモンスーンを経験した香取丸の小野たちは、開通したばかりのスエズ運河の入り口で下船し、エジプト観光を楽しんだ後にスエズ運河の終点で待つ香取丸の船上に戻り、そこから地中海に入った。香取丸がフランスの港町マルセイユに着岸したのは8月3日であった。

#### 〈サザンプトンからニューヨークまで〉

ロンドンの滞在を終えアメリカをめざした小野たちは、1839年に世界で初めて大西洋航路を発足させたキューナード・ライン<sup>17)</sup>の5万トンの大型客船を希望していたが、希望通りの空室がなかったため、サキソニア号のAデッキケビンでニューヨークに向かった。下の船室にはカナダのハリファックスに向かう多数の移民が乗船していたが、一等客の小野夫妻は、テーブルで一緒になったアメリカの家族連れたちとの交流を楽しみながら、約一週間の洋上生活を経てサキソニア号はニューヨーク港に着岸した<sup>18)</sup>。

#### 〈サンフランシスコから横浜まで〉

天洋丸は東洋汽船会社が1908(明治41)年に建造した北米航路の客船である<sup>19)</sup>。ドイツ滞在中に関東大震災を知り、帰国後に計画していた東京帝国大学における新聞学の講座開設も気になる小野たちであったが、7月1日にサンフランシスコで天洋丸に乗船し、7月19日の横浜港着岸で、小野の第1回目の洋行は終了した。

この天洋丸の船上での出来事として、「三菱の奨学金で欧米留学から帰国する南原君に会った」(小野【1971】195頁)と小野は記している。この「南原君」とは、後に東京大学の総長になる南原繁<sup>20)</sup>である。南原氏とはこの洋上生活を通じて交友関係を深めることになり、この関係は帰国後も継続していたようで、小野が東京大学に新聞学講座を開設する折に、南原は協力者の一人となる。この南原氏との出会いを小野は以下のように綴っている：

南原さんが新聞学に深い理解を持つようになったのも、この十八日間が端緒であると思うと、まことに意義深いものがある(小野【1971】195頁)。

#### 〈社交とマナーを学ぶ場としての船旅〉

ここでは、第1回の洋行で小野が利用した1920年代の定期航路の旅をまとめてみたが、当時の豪華客船の上級クラスの客室の利用者には西欧式のマナーや所作が求められていた。まさに洋行に旅立とうとしている日本人にとって、これから洋上生活を過ごすことになる客船への乗船は、西欧社会の扉を開くことを意味していた。

日本郵船株式会社が1931(昭和6)年に発行しているガイドブックである『渡欧案内』(13頁)には、乗船客のドレスコードについて以下のような記述がある<sup>21)</sup>：

船内の服装は便利の点からもまた国際的である点からも洋服が最も適当であります。  
 (中略) 晩餐には更衣するのが一般の習慣であります。さらに一等食堂において男子は  
 大抵スモーキング・ジャケット (タキシード) を着用されます。

香取丸の小野たちが利用した第二食堂の乗船客の多くは小野と同じ大学の出身者で、その  
 食事は帝国ホテル並みであったと小野は回想している。また小野の乗船した香取丸はマルセ  
 イユに到着する前夜にフェアウエルディナーを開催することになっており、クルーも参加し  
 た仮装パーティーを小野たちも楽しんでいる<sup>22)</sup>。

洋行で欧米に向かった日本人にとって、一か月以上を過ごすことになる客船のロビーや公  
 共施設は、国際的な交友関係を通じて、エリート候補たちに西欧社会では身に付けていて当  
 然の所作やマナーを学ばせるうえでも格好の教室でもあった。

### 第3章 1928 (昭和3) 年の旅

小野秀雄の第2回目の洋行は、1928 (昭和3) 年7月から同年の11月にかけて実施され  
 たが、1回目の洋行との最も大きな違いの一つは、小野たちが、この回の洋行ではシベリア  
 鉄道を利用したことであった。小野たちは、下関から韓国に渡り、鉄道を乗り継いでシベリ  
 ア鉄道の発着駅まで向かい、そこからシベリア鉄道による7日間の旅でヨーロッパに到着し  
 た<sup>23)</sup>。シベリア鉄道の開通によって、東京からベルリンまでの旅は、航路と鉄道で1か月  
 以上も要していたものが、12日から13日に短縮された。

図表3 第2回目の洋行で小野が訪れたヨーロッパの主な都市とその日程

日程	訪問地	主な活動
1928 (昭和3) 年		
7月31日	ベルリン	
8月7日	ケルン	国際新聞学会に参加 役員選挙で記録係になる ドイツにおける新聞学の発展に刺激を受ける
8月19日	ミュンヘン	デスター氏訪問 中世の資料、フルックブラッド4~50点を購入 (疎開時に紛失)
8月30日	パリ	観光
9月10日	ロンドン	大英博物館でロンドン教会発行の華文の定期刊行物を閲覧 1791年のオブザーバーを購入
9月21日	ハーグ	国立図書館で、官版バタヒヤ新聞の原著を発見 アムステルダム新聞社訪問 古書店巡り
9月26日	パリ	観光
10月4日	ベルリン	

出典：小野秀雄『新聞研究五十年』（毎日新聞社、1971年）



図表3は、小野が書き綴った洋行に関する記述から、二度目の洋行の大まかな日程をまとめたものである。1回目の旅の記述には人脈作りと観光がほぼ同じような比率を占めており、手探りでヨーロッパやアメリカの主要都市を漫勉なく周遊する行程であったのに対して、小野の2回目の旅は、国際新聞学会への参加や、ロンドンやハーグでの資料収集など、研究者としての実務的な活動のためにヨーロッパ内を移動している。

さらに、小野たちが1回目の洋行で訪れたベルリンはインフレに見舞われるなど社会情勢が悪化していたため、小野たちは早々に切り上げているが、今回の小野たちの旅では、ベルリンがホームベースとなっているように見受けられる。小野は、ドイツを中心として、フランス、英国、オランダを周遊しながらビジネスと観光を上手に組み合わせて旅をしているが、その中心がベルリンになっている。

小野たちの活動内容を見ていくと、観光を楽しむ都市、研究資料入手や閲覧のための目的地、学会や人脈作りのための訪問地といったように、限られた滞在時間を使い分けていることがわかる。シベリア鉄道の利用者には、ベルリンがヨーロッパ社会への入り口のようにもなっていることもその理由として挙げられるかもしれないが、2度目の欧州訪問では、初心者すでに卒業し、旅慣れた小野たちはヨーロッパ訪問を十分に満喫し、それは帰国後の小野にも大きな活力を与えたのではないだろうか。

この2度目の洋行でも相対的に長い滞在期間を確保していたパリでは「観光」とだけあり、具体的な記述はほとんど残されていない。第1回目の旅での小野のパリ滞在記ではその観光の様子が詳細に記されている、現地に滞在している日本人との交流に加えて、小野夫妻は、美術館、ノートルダム寺院、マドレーヌ寺院、バンテオン、エッフェル塔、凱旋門、ベルサイユ宮殿、百貨店（プランタン、ラファイエット）を周遊し、オペラ座のカルメンやベートーベンの第九の演奏会も楽しんでいる<sup>24)</sup>。また、クリスマスに参列したサン・ミッシェルのミサにも印象に残っているようである。第1回目の旅行と同様に、相対的に長い滞在期間となったこの第2回目の旅でのパリ滞在はどのようなものであったのだろうか、リピーターとしての小野夫妻の観光活動の内容には興味もたれるところである。

2度目の旅で、研究者小野にとっての最大の収穫は、ハーグで官版バタヒヤ新聞の原著を目にすることが出来た事であった。また、その後小野が心血を注ぐことになった東京大学の新聞研究所と上智大学の新聞科の設立であるが、ミュンヘンで再会したデスター氏が、後の小野に思いがけない展開をもたらすキーマンとなり、小野の日本のアカデミアにおける新しい境地の開拓へと結実して行くことは、洋行時の小野には想像すら出来なかったことだろう。

おわりに

その回想録の中で、小野が86歳になっても詳細に洋行の記録を綴っている部分を読み解

きながら、ドイツ語を学ぶことで新聞学の扉を開いた小野の人生のなかで、実際に自分が学んだ外国語の国に赴き自分の五感で確かめることのできたこの2回の旅は、小野の人生にとって大きな意味を持っていたに違いないと考えた。

本研究で用いた小野の回顧録である『新聞研究五十年』（1971年、毎日新聞社）のなかの小野自身の洋行の部分に記されているそれぞれの出来事やエピソードの分析に際しては、他の資料と照らし合わせることを心がけるなど、社会科学的研究における個人の回想録の使用における客観性の限界からかんがみて、過去の記憶の曖昧さ、事実誤認の可能性、重要な部分の欠落などの可能性も念頭に置くことを常に心がけたつもりである。

本論は、戦前の日本で特権階級のものであった贅沢な旅に焦点をあてたが、日本における新聞学の始祖と言われている小野が初めてヨーロッパの地に第一歩を踏み入ってから100年が経過した。豪華客船やシベリア鉄道を利用して目的地に向かうという、今日の旅からは想像できないくらいの時間をかけ、莫大な旅費だけではなくミッションへの思いが込められた旅で小野が目指した西欧社会は、若き日の小野の目にはどのように映ったのだろうか？

小野はこの洋行で、それまでに培ったドイツ語の能力を遺憾なく発揮してドイツの新聞学の最新情報を入手し、ジャーナリズム教育の実情を学びながら、人脈を作り、さらには観光も随所で行っている。当時の船旅による洋行は、狭い学問領域に留まることなく幅広い教養を身に着けるエリート教育の側面もあったのだろう。ドイツ語というコミュニケーション手段を駆使し、西欧人に臆することなく対峙することのできた国際人であった小野秀雄であるが、もしサバティカルという制度が整っていて、小野秀雄がもっと長くヨーロッパに滞在することが可能であったら、いかなる研究成果を日本にもたらしてくれたのだろうかと考えずにはいられない。

海外で学ぶ機会を得たものが、異文化と出合うことにより、帰国後は一転して自国の伝統文化を再評価するようになると言われているが、小野の伝統文化を尊重するスタンスは洋行の前からすでに芽生えていた。帰国後の小野は、コレクターとしての熱意を失うことなく、生涯にわたってかわら版（580点）や新聞錦絵（300点）など、近代的な新聞が誕生する以前の日本のジャーナリズムを伝えてくれる史料の収集と研究を続けた。近代化を遂げた日本は新聞という新しい媒体を誕生させたが、その背景にあるそれまでの伝統あってこそその発展であることを小野はいつごろから認識していたのだろうか？1回目の洋行の翌年には、明治文化研究会にも加わっている。

幕末から明治にかけて新聞を登場させた日本人が捨て去ってしまった近代化以前の日本人のコミュニケーションを伝えてくれる史料の研究に、小野は晩年まで心血を注ぎ続けたという<sup>25)</sup>。小野のこれらのコレクションは、現在も母校の研究所に保管されており、新聞研究のための史料という枠を超えて、歴史的な価値のある文化財となっている<sup>26)</sup>。

ドイツの新聞学から出発した日本のマス・コミュニケーション、マス・メディア研究は、

戦後になるとアメリカの大きな影響を受けた。パイオニアである小野の洋行をたどることで触れることのできた日本の新聞学の黎明期であるが、これからのマス・メディア、マス・コミュニケーション研究の在り方を考えるうえで、小野の洋行は我々にいかなるヒントを与えてくれるのかという点に関しては今後も問い続けて行きたい。

## 注

- 1) 巻末の〔参考資料 (1) : 明治期の洋行〕参照。  
1871 (明治 4) 年の岩倉使節団が規模からも最大のものであったが、それに先立つ幕末においても、長州藩と薩摩藩がそれぞれ 1863 (文久 3) 年と 1865 (慶応元) 年に将来有望な人材を留学させている。海外視察だけでなく、明治新政府からは多くの留学生がアメリカやヨーロッパに派遣され、帰国後はそれぞれの分野で活躍した。  
洋行や明治期の留学全般については大久保喬樹『洋行の時代—岩倉使節団から横光利一まで—』(中央公論新社, 2008 年), 石附実『近代日本の海外留学史』(中央公論社, 1992 年) が参考になる。
- 2) 東京帝国大学『東京帝国大学五十年史』上・下 (1932 年)
- 3) 1886 (明治 19) 年 4 月 29 日, 京都市に設立。吉川弘文館『明治時代史大辞典第四巻』(吉川弘文館, 2013 年) 640 頁。
- 4) 小野秀雄『新聞研究五十年』(毎日新聞社, 1971 年) 13-22 頁。
- 5) 東京帝国大学『東京帝国大学五十年史』上巻 1288 頁。
- 6) 小野秀雄 前掲書 94 頁。
- 7) 日本マス・コミュニケーション学会『日本マス・コミュニケーション学会 50 年史』(三嶺書店, 2001 年) 11 頁。
- 8) 徳川幕府の末期に幕府の洋書調所が発行したニュース冊子で、オランダ政府の献上したバタビア政府の機関紙から世界情勢を抜粋して翻訳したもの。小野秀雄『内外新聞史』(日本新聞協会, 1979 年) 212 頁。
- 9) 東京帝国大学『東京帝国大学五十年史』下巻 939 頁。
- 10) 小野秀雄 前掲書 151 頁。
- 11) 宮川隆泰『岩崎小彌太』(中央公論社, 1996 年) 4-35 頁。岩崎小彌太の留学期間は夏目漱石のロンドン時代と重複している。渡英直後の夏目漱石もオックスフォードやケンブリッジでの研究活動を希望しており、ヨーロッパに向かう船上で知り合いになった知人のつてを頼ってペンブローク・カレッジを訪れているが、文部省から支給されていた夏目漱石の奨学金では無理であることを知り、夏目はオックスブリッジのカレッジへの入学を断念した。同時期に、大倉喜八郎の嫡男・大倉喜七郎もケンブリッジのトリニティ・カレッジに留学している。
- 12) 小野秀雄 前掲書 103 頁。
- 13) 「小野秀雄名誉教授略歴と業績」上智大学コミュニケーション学会『コミュニケーション研究』第 10 号 (1977 年) 7 頁。
- 14) 1951 (昭和 26) 年に東京大学を退官の後に小野は、上智大学で新聞学科長を 1966 (昭和 41) 年の定年退職まで務めた。
- 15) 小野秀雄 前掲書 193 頁。

- 16) 香取丸は、日本郵船が1914（大正3）年から就航させていた、1万トン級の客船で、欧州航路の定期便に使用された。野間恒『増補 豪華客船の文化史』（NTT出版、2008年）135頁。
- 17) 野間恒『豪華客船の文化史』（NTT出版、1993年）3-11頁。
- 18) 小野秀雄 前掲書 188頁。
- 19) 丸山雍成他編『日本交通史辞典』（吉川弘文館、2003年）604頁。東洋汽船会社が1908（明治41）年に建造した北米航路の客船。1万3千454総トンで、一万総トン以上の汽船としては日本最初の客船であった。収容人数は、1等 47人、2等 53人、3等 268人であった。
- 20) 南原繁（1889-1974）は、大正・昭和期の政治学者。日外アソシエーツ編集部『新訂増補人物レファレンス事典 昭和（戦後）・平成編 せ〜わ』（日外アソシエーツ、2003年）1843頁。
- 21) 荒山正彦監修・解説『シリーズ明治・大正の旅行 第I期旅行案内書集成 第21巻 日本郵船株式会社渡航案内／埃及見物／渡欧案内／欧州大陸旅行案内／郵船の世界一周』（ゆまに書房、2015年）227頁。
- 22) 小野秀雄 前掲書 159頁。
- 23) 小野秀雄 前掲書 220-227頁。
- 24) 小野秀雄 前掲書 179-180頁。小野夫妻の第1回目の旅では、イタリアでも観光旅行を行っているさまが記されており、パリと同様、今日でも日本人が好んで訪れる有名な観光スポットはほとんど網羅されている。
- 25) 筆者が現在所属する東京経済大学コミュニケーション学部へ着任したのは2002（平成14）年で、メディア史研究の香内三郎先生が着任時にはご存命であった。あるとき筆者が、上智大学の大学院生時代の思い出として、文京区の小野先生のご自宅にて先生の遺品整理をなさっていた内川芳美先生のお手伝いをした経験があり、内川先生が書庫から小野先生のかわら板や新聞錦絵の膨大なコレクションを発見なさった瞬間に居合わせたことを香内先生にお話したことがあった。その後程なく、お元気だった頃の小野先生との思い出として香内先生がわざわざお手紙を下さり、最後までかわら版や新聞錦絵研究に心血を注いでおられた晩年の小野先生の様子を教えてくださいました。
- 26) 木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生—かわら版と新聞錦絵の情報世界』（東京大学総合研究博物館、1999年）参照。

#### 参 考 文 献

- 荒山正彦監修・解説『シリーズ明治・大正の旅行 第I期旅行案内書集成 第21巻 日本郵船株式会社渡航案内／埃及見物／渡欧案内／欧州大陸旅行案内／郵船の世界一周』（ゆまに書房、2015年）
- 荒山正彦監修・解説『シリーズ明治・大正の旅行 第I期旅行案内書集成 第22巻 桑港航路案内／埃及見物／米国鉄道旅行案内／豪州航路案内／熱帯地航海の魅惑／爪哇とパリ／布哇案内』（ゆまに書房、2015年）
- 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』（吉川弘文館、2002年）
- 石附実『近代日本の海外留学史』（中央公論社、1992年）
- 大久保喬樹『洋行の時代—岩倉使節団から横光利一まで—』（中央公論新社、2008年）
- 大塚孝明『密航留学生たちの明治維新一井上馨と幕末藩士』（日本放送出版協会、2001年）

- 小野秀雄『新聞研究五十年』(毎日新聞社, 1971年)
- 小野秀雄『内外新聞史』(日本新聞協会, 1979年)
- 小島英俊『旅する漱石と近代交通—鉄道・船・人力車』(平凡社, 2022年)
- 木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生—かわら版と新聞錦絵の情報世界』(東京大学総合研究博物館, 1999年)
- シュトラスナー, エーリッヒ/大友展也訳『ドイツ新聞学事始—新聞ジャーナリズムの歴史と課題』(三元社, 2002年=原著出版1997年(初版), 1999年)
- 上智大学コミュニケーション学会『コミュニケーション研究』第10号(1977年)
- 上智大学文学部新聞学科『上智大学新聞学科五十年の記録』(上智大学文学部新聞学科, 1981年)
- 新日本古典文学大系明治編5『海外見聞集』(岩波書店, 2009年)
- 東京帝国大学『東京帝国大学五十年史』上・下(1932年)
- Hasegawa Tomoko “The Japanese Grand Tour to Great Britain in the Early 1900s: The Case of Kishichiro Okura at Trinity College, Cambridge,” *The Journal of Communication Studies* (コミュニケーション科学) No. 48, 2018/11/24 Pp. 21-39
- 古川江里子「長谷川如是閑のロンドン体験記—1910年のロンドンを中心に」メディア史研究会編『メディア史研究』44号(2018年11月12日)29-53頁
- 日本マス・コミュニケーション学会『日本マス・コミュニケーション学会50年史』(三嶺書店, 2001年)
- 野間恒『豪華客船の文化史』(NTT出版, 1993年)
- 野間恒『増補 豪華客船の文化史』(NTT出版, 2008年)
- 宮川隆泰『岩崎小彌太』(中央公論社, 1996年)

## 参考資料1 明治期の洋行—ジャーナリストを中心に—

年代	出来事と主な渡航者
1860年代	1862（文久元）年 福地源一郎（12月～文久2年1月） 1863（文久3）年 長州藩：伊藤博文、井上馨 1865（慶応元）年 薩摩藩：森有礼 1865（慶応元）年 福地源一郎（5月～3年1月）
1870年代	1870（明治3）年 福地源一郎（11月～4年5月） 1871（明治4）年 岩倉使節団（11月～6年9月）、福地源一郎参加 1872（明治5）年 大倉喜八郎（7月～6年12月） 1872（明治5）年 成島柳北（9月～6年7月） 1875（明治8）年 公費留学制度発足
1880年代	1885（明治18）年 森鷗外（～21年）
1890年代	1896（明治29）年 徳富蘇峰（5月～30年7月）
1900年代	1900（明治33）年 夏目漱石 ロンドン在住 岩崎小彌太 ケンブリッジ、ペンブローク・カレッジ 大倉喜七郎 ケンブリッジ・トリニティ・カレッジ 1901（明治44）年 シベリア鉄道開通 1908（明治41）年 朝日新聞社主催世界一周旅行
1910年代	1910（明治43）年 長谷川如是閑 日英博覧会視察（3月18日～11月）

出典：参考文献をもとに筆者作成

## 参考資料2 小野秀雄関連の年表 (1885～1932)

年度	主な出来事
1885 (明治 18)	誕生 (滋賀県)
1906 (明治 39)	東京帝国大学入学
1907 (明治 40)	
1908 (明治 41)	
1910 (明治 43)	東京帝国大学卒業
1911 (明治 44)	萬朝報入社
1912 (大正 1)	
1914 (大正 3)	
1915 (大正 4)	
1917 (大正 6)	
1918 (大正 7)	東京日日新聞入社
1919 (大正 8)	大学院入学
1921 (大正 10)	
1922 (大正 11)	『日本新聞発達史』
1923 (大正 12)	第1回目洋行：7月～1924 (大正 13) 年 8月
1924 (大正 13)	明治文化研究会
1925 (大正 14)	
1926 (昭和 1)	
1927 (昭和 2)	
1928 (昭和 3)	第2回洋行：7月～同年 11月
1929 (昭和 4)	東京大学に日本初の新聞研究所設立 (11月)
1930 (昭和 5)	
1931 (昭和 6)	
1932 (昭和 7)	上智大学専門部に新聞科設立 (4月)

出典：小野秀雄『新聞研究五十年』（毎日新聞社，1971年）